

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 15 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370381

研究課題名(和文) モダニズム/エグゾティシズム研究 文学・芸術における異化作用の諸相

研究課題名(英文) Study of Modernism and Exoticism : different aspects of dissimilation in literature and arts

研究代表者

谷 昌親 (TANI, MASACHIKA)

早稲田大学・法学大学院・教授

研究者番号：90197517

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：まずはシュルレアリスムをポスト・コロニアリズムの視点から見直す試みに取り組み、今回は、画家アンドレ・マッソンがマルチニックやアメリカの自然、さらにはアメリカ先住民から受けた影響について調べ、論文にまとめた。また、ミシェル・レリス独特の「驚異」の概念の重要性を再確認し、「異化」に通じつつも、安易なエグゾティシズムと一線を画し、日常生活のなかにも見出せるその「驚異」のあり方を明らかにした。肉眼による知覚に対する異化作用をもたらす映像にも注目し、シュルレアリスムとの関係で3人の日本の写真家について論じるとともに、映画の分野ではヌーヴェル・ヴァーグについての調査研究をおこなった。

研究成果の概要(英文)： Seeking the possibility to take a fresh look at Surrealism from the point of view of post colonialism, our research was focused on Andre Masson, who was influenced by the nature and the culture of Martinique and America, especially by the culture of American Indians. We also realized the importance of the concept "le merveilleux (the fabulous)" in the work of Michel Leiris. Excluding an easy exoticism, he tried to find "le merveilleux" even in our everyday life and to make clear his own way to think about this concept deeply connected to the function of dissimilation.

The visual media attracted our interest too as it allows us to look at the world in a new way, different from our usual perception. So we carried out research on three Japanese photographers who worked under the influence of surrealism. We thought also that the movement of "La Nouvelle Vague (New Wave)" was deserved our attention because it brought a sort of dissimilation in the cinematographic expression.

研究分野：人文学

キーワード：仏文学 仏語圏文学

## 1. 研究開始当初の背景

本研究は、20世紀初頭の西欧における文学・芸術上のモダニズムを主な対象とし、その本質をエグゾティシズムとの関係から解明しようとしたものである。転換期に生じたモダニズムは、21世紀に入った現在、資料を新しい視点から検討する必要がある、文学・芸術のこれからの可能性を探るうえでも解明が不可欠であろう。そこで、拙論「植民地博覧会に降る雨 ―一九三一年のシュルレアリスム」(科研費研究成果報告書所収、平成19年)以降のシュルレアリストとポスト・コロニアリズムの問題を扱った一連の論文、そして拙著『詩人とボクサー ―アルチュール・クラヴァン伝』(青土社、平成14年)および『ロジェ・ジルベール＝ルコント ―虚無へ誘う風』(水声社、平成22年)において扱ったテーマをさらに深めるため、平成22-24年度科研費研究(課題番号22520337)において、とくに「異化作用」に注目した研究を進めてきた。それを継承、発展させるため、エグゾティシズムに注目する一方で、そのエグゾティシズムの作用により、われわれのうちで忘却されていた記憶や感受性が甦る、広義のノスタルジーの作用にも注目しなければならないとも考えるようになった(これに関しては、その後、実際に研究を進めていくなかで、日常性のなかに「驚異」を見出すというレリス的な姿勢の探求につながる)。そのためには、まずは、「異化効果」の演劇理論で知られるプレヒトにも影響を与えたシクロフスキーに遡りつつ、日常に見慣れぬことがらをその関連から解き放ち、ずれを与え、奇異なものにする「異化」の作用に注目して、モダニズムの本質をとらえ直すことで、20世紀に登場してきたさまざまな前衛的文学・芸術運動の再検討をめざそうと考えた。一方で、ロラン・バルトが提唱した「第3の意味」や「プンクトゥム」という概念を再検討し、芸術作品に接したときにわれわれのうちに呼び覚まされる感覚を分析してみるというのも当初の方針であった。

## 2. 研究の目的

### (1) 全体的な見取り図

フランスの文化人類学者レヴィ＝ストロースは、近代の科学的思考と異なる仕方の世界を概念化する作用を「野生の思考」と呼び、そうした思考のはらむ創造性に注目した。われわれ現代人の大半にとって野生の思考は違和感を生じさせるものとなるが、その一方で、近代合理主義のためにわれわれが失ってしまった豊かさを取り戻す契機となりうる。そうした野生の思考に通じる働きを文学や芸術のうちに見ていこうとするのが本研究の目的である。そうした観点からすると、ヨーロッパの伝統的な表現様式から離れ、未開芸術などにも関心を抱いていたダダやシュルレアリスムなどの前衛芸術運動は非常に重要であり、同時に、文字通り世界の新たな

見方を可能にした写真・映画といった新しい芸術ジャンルのもたらした変化にも、目を配っていく必要がある。

いずれの場合も、従来の慣習的表現からすれば「異化」と呼ぶしかない事態が生じてくるのだが、その背景にはエグゾティシズムの二つの形態が挙げられる。一つはアフリカ、オセアニア、アジアなどの植民地文化の導入による西洋文明の見直しという字義通りのエグゾティシズムであり、もう一つは、フロイトによって提唱された精神分析が無意識の領域に光を当てたことで、人間の精神活動が新たな視点から見直され、西洋近代的な自我に未知の要素がもたらされたという事態を指す。後者は、人間の精神世界に関係するものであるが、西洋合理主義の「外部」が問題になるという意味では、広義のエグゾティシズムと考えられるのである。

このエグゾティシズムの二つのかたちを「異化」とからめて考えてみると、1910年代から20年代にかけての時期に登場してきたダダやシュルレアリスム、そしてその周辺に湧き起こったさまざまな動きが、文学史や芸術史、さらには思想史においてどのような役割を果たしたかがより明確になってくるだろう。これは、より大きな捉え方をすれば、モダニズムと異化作用の問題とも呼ぶことができ、そのときに浮上してくるのが、19世紀半ばから末にかけての時期に誕生し、人間の知覚作用や世界観に新たな視点をもたらした写真と映画の問題である。この新しいメディアによって促された表現形態についても、それを従来の表現に対する異化作用と見なし、エグゾティシズムの観点からとらえなおすことができるだろう。そして、そうした新しい表現がなぜわれわれのうちに呼び覚ます一種の無意識的な記憶(集団的無意識も含む)に注目するならば、一種のノスタルジー的な感覚が関係していることも明らかになってくるだろう。

### (2) 研究の5つの柱

以上を全体的な見取り図とした上で、具体的には次の5つの柱に分けて研究をおこなおうとした。

a) レーモン・ルーセル研究 レーモン・ルーセル(1877-1933)はダダ・シュルレアリスムの先駆者と見なされているが、本人はこうした前衛芸術運動には興味がなく、世界各地を旅行したほかは、ただひたすら自分の殻に閉じこもって創作に没頭するうちに、従来の文学作品とはきわめてことなる、それこそ一種の異化作用をはらんだ独特の作品を生み出した。こうしたルーセルの例から、モダニズムの特異なあり方のひとつが見えてくる。

b) ミシェル・レリス研究 ミシェル・レリス(1901-1990)は、1920年代、シュルレアリストとして活動したのち、1931-33年のダカール・ジブチ調査団に参加して民族誌学者となり、その一方で、精神分析の治療も受けた

つ、自伝的エッセの執筆に没頭した。彼は、民族誌学を学ぶ一方、その創作活動において、彼自身の言葉を借りるなら、「日常生活の中の聖なるもの」にこだわり、ありのままの現実に生じる微細な異化作用を追い求めていたと考えられるのである。

c)ダダ・シュルレアリスム研究 フランスのダダ・シュルレアリスム運動を語る場合に、ブルトンに着目する一方で、やや周辺的位置にいたさまざまなグループとの関係から見ていくことも重要であろう。とりわけ、もともとは、プロメ通り 45 番地にあった画家アンドレ・マッソンのアトリエに集まることで形成されたグループには、上記のレリスも参加し、のちには、シュルレアリストではなかったとはいえ、ジョルジュ・バタイユも加わり、中心的な役割を果たすようになるのだが、このグループにおいては、ブルトンたちのグループ同様に精神分析の影響が認められる一方で、民族学への関心が高く、異文化をとおして自己の相対化がおこなわれた点が重要である。いずれにせよ、マッソンのグループも、ブルトンのグループも、広義のエグゾティシズムと深い関連があるのは明らかであり、さらに、文学のみにとどまらず、絵画・彫刻・写真・映画といったさまざまな領域をとおして、人間を固定的な知覚の枠組みから解放する活動をおこない、従来の文化に対する根本的な異化作用を働かせたのである。

d)視覚芸術と無意識/身体性 写真や映画のように、カメラという機械をとおして現実をとらえる新しい芸術の出現によって、世界に対する人間の関わり方までが変化した。ベンヤミンの言葉を待つまでもなく、「視覚における無意識的なものは、カメラによってはじめて私たちに知られる」のである（そしてその「無意識的なもの」の現出を、われわれの文脈では、一種のノスタルジーと呼ぶこともでき、それはわれわれの身体性にかかわってくる）。そうした観点から見ると、モダニズムとも深く結びついている写真や映画といった表現形式が、人間に対して異化作用を及ぼしたことがわかっていくはずである。そのような変化は、戦後、1960 年代あたりに盛んになる前衛芸術運動に継承され、特にわれわれの身体感覚を問い直す活動がおこなわれるようになるのである。

e)20 世紀文化・社会・思想研究 モダニズム、そしてそのモダニズムに深くかかわる異化作用が、19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけての西欧の社会的・文化的文脈から生まれてきたことを考えるなら、そうした文脈の検討をすることなしにこれらの問題を論じることはいえない。また、すぐれた文学・芸術運動には必ず思想的裏付けがあり、思想もまた文学・芸術運動から刺激を受ける以上、この時代の思想を研究することも必要になる。しかも、モダニズムの本質をなす広義のエグゾティシズム（そしてある意味でそれに

付随する、自己の中の忘却された部分にまで至ろうとするノスタルジーの感覚）は、西洋東洋、文明 未開といった二項対立を乗り越える、新しい文化のあり方を内包していたと言えよう。たとえば、ジャック・デリダの「脱構築」やジル・ドゥルーズの「リゾーム」といった概念も、広義のエグゾティシズムを生み出す異化作用に比することができるのである。それだけに、こうした視点からの研究は、モダニズムをポスト・モダニズムの視点から検証しなおすことにもつながるだろう。

### 3. 研究の方法

すでに述べたように、本研究は次の 5 つの柱からなる。

- a)レーモン・ルーセル研究
- b)ミシェル・レリス研究
- c)ダダ・シュルレアリスム研究
- d)視覚芸術と無意識/身体性
- e)20 世紀文化・社会・思想研究

これらの研究を同時並行的におこなってきたが、年度ごとに重点的に取り組む研究を設定し、順次取り組んだ。この 3 年間について言うと、b)と c)の分野の研究が先行するかたちとなったが、いずれにしても、a)~c)が本研究の核である。それに対し、d)はそれをさらに視覚芸術の分野に広げつつ、異なる視点からの考察を可能にさせ、e)は全体の基底部を構成するものである。

(1)ポスト・コロニアリズムの観点からの研究  
今回は、以前からおこなっていたシュルレアリスムとポスト・コロニアリズムの関係についての調査や考察を継続させるかたちで研究を始めた。ただ、これまでに文学関係のシュルレアリストについてはほぼひととおり取り上げたため、アンドレ・マッソンを皮切りに、今度は画家たちについての研究へとやや方向転換したかたちになる。マッソンについては論文にまとめたが、次に予定していたマックス・エルンストの資料の読み込みや整理に時間がかかり、その後の具体的な成果を出せずにいる。また、こうした画家についての研究を、これまでの文学者についての研究にどう接合し、全体としてはどのようなかたちにまとめていくのかを考えねばならないだろう。

#### (2)「驚異」の概念を軸に据えた研究

一方で、これも以前からおこなっていたミシェル・レリスの著書 *Frêle Bruit* の翻訳を進める過程で、「驚異」の概念についてあらためて考えざるをえなくなった。ポスト・コロニアリズムと「驚異」は一見すると無関係のようにも見えるが、レリス自身、民族誌学者としての顔を持ち、フィールドワークもこなしたわけで、安易なエキゾティシズムと訣別して自分にとっての「驚異」を明確にしよ

うとしていただけない、実は深いつながりがある。そのレリスなりの「驚異」について考察するためには、まず、ブルトン、さらにはブルトンを継承したとされるピエール・マビューの「驚異」観を明確にし、それとのレリスの偏差を見極めることが重要であった。同時に、「驚異」についての省察に多くのページをさいている *Frêle Bruit* を精読しなおすことも当然ながら必要で、さらに、この書物についての研究論文などを読みつつ、考察を深めていった。そのなかで明らかになってきたのは、この「驚異」が、レリスの民族誌学者らしいこだわりを示す「日常生活のなかの聖なるもの」という考え方に通じるということであった。そして、そうした方向性で「驚異」について考えていくためには、レリスの友人でもあったジョルジュ・パタイユにおける「聖なるもの」とレリスにおける「聖なるもの」に違いがあるのかわからないのか、という問題を考察する必要があり、以後はこの点について研究を続けていかねばならない。

### (3) 「異化」の観点からの視覚芸術研究

さらに、「驚異」が、なにか特異な非日常的体験などではなく、日常生活のなかにも見出せるものだという考え方は、なにげない現実をそれこそ一種の「驚異」に変容させる力をもつ写真や映画といった映像ジャンルとの親近性を想起させる。

#### 写真の分野

とくに写真については、シュルレアリスムの本質に通じるものがあり、ブルトンは自動記述の働きを写真に喩えているほどだ。したがって、シュルレアリスムと写真に共通する異化作用について調べることが重要であると考えられた。

#### 映画の分野

また、映画に関しては、シュルレアリスムとの関係はやや曖昧な面がある一方で、シュルレアリスムのさまざまな試みのなかの一部は、同時代の映画よりも、むしろ第2次世界大戦後のヌーヴェル・ヴァーグに引き継がれた面があると言えそうだ。グループとしての複数性の尊重、都市のなかでのさまざまな出会いの重視、オートマティスムと即興演出の共通点など、論点はさまざまなものが見つかる。さらに、批評家アンドレ・バザンが存在論的と呼び、トリュフォーやロメールをはじめ、ヌーヴェル・ヴァーグの監督たちに影響を与えた新しい映画のあり方は、われわれが通常は見落としている日常のなかの細部を浮き彫りにするという意味では、レリス的な「驚異」の概念に接続される部分がある。そうした観点からヌーヴェル・ヴァーグについての研究も必要であると考えた。

さらには、ヌーヴェル・ヴァーグ以外にも、日常生活のなかに「驚異」を見いだそうとした映画監督としては、小津安二郎のような存在もあり、また、ハリウッドのなかで古典的

な映画作りをいわば脱構築することで、映画というメディアに異化作用をもたらしたニコラス・レイをはじめとする1950年代のアメリカの映画監督たちも興味深く、こうした角度から映画について論じることは、広義のエグゾティシズムに通じていくはずである。

## 4. 研究成果

平成25年度(2013年)~平成27年度(2015年度)の研究成果を項目ごとに示す。なお、研究の柱との関係で言うと、以下の(1)と(3)はc)、(2)はb)、(4)はc)とd)、(5)はd)のそれぞれ一環であり、(6)は全体の発展形態ということになる

### (1) シュルレアリスムとポスト・コロニアリズム

まずは、以前から継続してきた、シュルレアリスムとポスト・コロニアリズムの関係の調査・分析に力をそそいだ。具体的には、シュルレアリスムにおいて重要な役割を演じた画家アンドレ・マッソンが、マルチニック滞在においていかに現地の自然から影響を受けたか、またその後亡命生活を過ごしたアメリカの自然や先住民の文化をどのように自分の創作活動に取り込んだかを調べた。また、そのマッソンが戦後は中国のいわゆる山水画に惹かれていったことも確認し、そうした異文化との接触によって独自の世界を切り開いたさまを検証した。まさに異化作用の繰り返しマッソンという画家を形成していたといえる。

さらにその延長として、もうひとりのシュルレアリスムの画家マックス・エルンストについても、とりわけアメリカ・インディアンの文化との関係を調べた。その結果、彼が受けた影響についても明らかになってきているが、エルンストに関してはまだ調査すべきと思われる資料も多く残っており、論文にまとめる段階に至っていない。

### (2) 「驚異」の概念

この三年間で、ミシェル・レリスの名著『ゲームの規則』4部作の最終巻 *Frêle Bruit* の翻訳をほぼ終わらせたが、その過程で、この書物のなかで特に問題になっており、またシュルレアリスムについて考える場合に重要な概念である「驚異」le merveilleux について再考する必要性を強く感じた。そこで、アンドレ・ブルトンにおける「驚異」の取り扱い方も比較しつつ、レリスの考え方を調べ、論文にまとめた。「驚異」は、まさに「異化」に通じる概念として重要であるだけでなく、ブルトンの場合とはやや異なり、日常的なものなかにあえて一種の異化作用を見出そうとするレリスの独特の姿勢を浮き彫りにしてくれるものでもあることを、ある程度まで明らかにできたと考えている。

### (3) シュルレアリスムと「反抗」の概念

アメリカで2017年に刊行される予定の *Encyclopedia of surrealism* のために原稿を

執筆する過程で、シュルレアリスムのなかでも通常はそれほど大きく取り上げられないロジェ・ヴィトラック、モーリス・ブランシャール、アラン・ジュフロワについて調べたが、そのなかで、この3人にとって何よりも「反抗」の概念が重要であり、それがまさにシュルレアリスムの核のひとつであることを確認できた。そうした「反抗」は、当然ながらさまざまなかたちをとって表現に昇華されるわけだが、それが「異化」につながっていくことは容易に想像できるだろう。

#### (4)シュルレアリスムと写真

以前から、シュルレアリスムの思想とメディアとしての写真の係に注目し、論文も書いてきたが、今回、日本のシュルレアリスム写真家と呼べる中山岩太、山本悍右、大辻清司について調べ、それぞれの写真家の作品に見られる異化作用について考察して伝説の論文にまとめた。

もともと、写真というメディア自体が、われわれの肉眼による知覚に対する異化作用をもたらす性質を備えているが、これら3人の写真家は、それぞれの方法で、そうした写真の異化作用を存分に引出し、そのことでシュルレアリスムにつながる表現を手に入れたのである。

#### (5)映画における異化作用

もともと映画は静止画の連続で成り立っているわけだが、物語性やテーマ性を獲得する過程で、写真が持っていた異化作用をむしろ抑圧する方向にむかった。20世紀前半に顕著な形で現れたそうした方向性に対し、ひとつの転回点をなしたのが、スタジオ・システム崩壊の時期に活動したアメリカの監督であり、またフランスでヌーヴェル・ヴァーグの運動を起こした監督たちである。そうした観点に立ち、ニコラス・レイやエリック・ロメールについて論じた。

また、日本の小津安二郎監督もまた、調和に満ちたように見える相似形を画面に作り出しつつ、それが崩れる瞬間を見据えることで、真の意味で映画に時間を導入したと言えるのだが、それもまた均質な世界に異分子的要素が混入する場面を描いているわけで、一種の異化作用の発動と言えるだろう。しかもそれは、日常生活のなかに「驚異」を見いだそうとする試みでもあり、その点で、ミシェル・レリスの文学的営為とも通底するのである。

#### (6)現代文学への影響

シュルレアリスム的な異化作用、映像表現による異化作用、その双方の影響下に創作活動をおこなっていると言える現代作家ジャン・エシュノーズは、本研究の視点からはきわめて重要だが、そのエシュノーズの中篇 *L'Occupation des sols* をめぐる学会に参加し、発表をするとともに、さまざまな国の研究者と意見交流ができたことも貴重であった。

#### (7)今後の課題

シュルレアリスムをポスト・コロニアリズム的な観点から見直す研究は継続中だが、エルンストなどの画家についての研究成果をまとめきれていないので、まずはこれを完成させる必要があるだろう。また、ポスト・コロニアリズム的な視点を補強するためには、ヨーロッパ出身のシュルレアリストばかりではなく、たとえばマルチニックのエメ・セゼール、キューバ人で中国系の血も流れているウィルフレッド・ラムといった詩人・画家たちについての研究もしなければならない。

「驚異」についての研究はまだ端緒にすぎたばかりで、今後は、レリスとバタイユの比較をするなかで、レリス的な「驚異」の概念をさらに明確にしていく必要がある。

また、本研究の基盤にある「異化」の概念についても、ロシア・アヴァンギャルドにまで遡って、いま一度検証しなおしておく必要があるだろう。一方で、ノスタルジックな感覚について考えるためには、ロラン・バルトの批評を読み直すことも求められるだろう。

一方、このところ、他の研究対象にさく時間が多くなったこともあり、最初の a) の柱のテーマであるレーモン・ルーセルについての研究がやや手薄になっているので、彼独特の枠構造へのこだわりについて調べる一方、彼の戯曲をシュルレアリスム的なオートマティスムに関連づけることを試みていかなければならない。

映像関係では、写真についてはシュルレアリスムとの関連づけをすでにおこなってきたが、ヌーヴェル・ヴァーグをはじめ、小津やニコラス・レイなど、古典的な映画のあり方に一種の異化作用をもたらした監督について研究し、シュルレアリスム的な無意識の問題や「驚異」の問題との通底性を探る一方で、シュルレアリストたちにとって映画というメディアが荷っていた意義を調べ、シュルレアリスムと映画の明確な連結符を構築する必要があるだろう。そのために、デスノスやスーポーの映画論を再読し、考察を加えていく予定である。

また、写真や映画をはじめとする視覚芸術全体について、その異化作用を解明するためには、視覚論の研究をしていくことも必要になるだろう。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 6 件)

谷 昌親「「驚異」の概念をめぐるブルトンからレリスへの架橋」、『人文論集』、査読無、第 54 号、2016, p. 19-37。  
Masachika TANI, “A la recherche de la surréalité par la photographie : trios

photographes japonais dans la lignée  
surréaliste, 査読無, *Mélusine*, XXXVI, 2016,  
p. 229-246.

谷 昌親「映画における可視性と不可視  
性 エリック・ロメール『飛行士の妻』  
をめぐる」、『人文論集』、査読無、第  
53号、2015,p. 57-73。

谷 昌親「アンドレ・マッソン」,「不定  
形の宇宙 アンドレ・マッソンまたは  
変貌する身体」、『人文論集』、査読無、第  
52号、2014, p.1-19。

〔学会発表〕(計 1件)

« Traduire c'est trahir ? », *Autour de Jean  
Echenoz : L'Occupation des sols : un défi pour  
les traducteurs ?* (Journées scientifiques  
organisées par le Laboratoire LATTICE),  
École normale supérieure, Paris, le 20 avril  
2013.

## 6 . 研究組織

(1)研究代表者

谷 昌親 (TANI MASACHIKA)

早稲田大学法学学術院教授

研究者番号 : 90197517